

金の魚

小川未明

青空文庫

昔、あるところに金持ちがありまして、なんの不自由もなく暮らしていましたが、ふと病氣にかかりました。

世間に、その名の聞こえたほどの大金持ちでありましたから、いい医者という医者は、いずれも一度は呼んで、みてもらいました。けれど、どの医者にも、その病氣の名がわかりませんばかりでなく、それをなおす見込みすらつきませんでした。そのうちに金持ちはだんだん体が悪くなるばかりでありました。

そのとき、旅からきた上手な占い者がありました。その男は、過去いっさいのことをあてたばかりでなく、未来のこともいっさいを秘術によってあてたのでありました。

金持ちは、せめてもの思い出に、自分の不思議な病氣についてみてもらうことにいたしました。占い者は、金持ちの病氣を占って、いいますのには、

「こんな病氣は、またと世間にあるような病氣でない。どこが悪いということなく、だんだん血の気が体からなくなってしまうて、そして、ばたりと倒れて死んでしまうのだ。この病氣は、どんな名医にかかってもなおらない。ただ一つこの病氣のなおる薬がある。それは、めつたに獲られるものでないが、金色の魚を食べるとなおってしまう。こ

の魚は、まれに河の中にすんでいるものだ。」と、その占い者はいいました。

金持ちは、金色の魚を食べれば、この病気がなおるということを聞きますと、絶望のうちにかなかな希望を認めたのであります。金はいくらでもあるから、金の力で、この金色の魚を探しだそうと思つたのであります。

そこで、国中に、

「金色の魚を捕らえてくれたものには、千両のお礼をする。」といいふらしたのであります。

世間の人々は、このうわさを耳にすると大さわぎでありました。そこにもここにも、寄り集まつて金色の魚の話をしたのであります。

「金色の魚なんてあるものかい。」と、甲がいますと、

「それは、あるそうだ。あるとき、女が河で菜つ葉を洗っていると、目の前に金色の魚が浮いて沈んだことがあるそうだ。そればかりでない、昔から、幾人も金色の魚を見たものがあるということだ。」と、乙がいました。

「五、六年前も、この町のはずれを流れている河で金色の魚を見たものがあるそうだと、丙がいました。」

そこで、金色こんじきの魚うおはかならずしもいないわけではないというので、町まちの人々ひとびとはもちろん、村むらの人々ひとびとまでみな金色こんじきの魚うおを捕とらえて金持ちかねもちのもとへ持もつてゆこうと思おもわないものはありませんでした。

河辺かわべには、毎日まいにち幾百人いくにんということなく、無数むすうの人々ひとびとが両岸りやうがんに並ならんで釣つりをしました。そして、金色こんじきの魚うおを自分じぶんが釣つろうと思おもつたのでありました。

毎日まいにち、毎日まいにち、中なかには自分じぶんの仕事しごとまで休やすんで河かわにやつてきて糸いとを垂たれているものもありました。

「なに、仕事しごとぐらい休やすんでも、金色こんじきの魚うおを釣つたら千両りやうになるんだ。そうすれば、一生しやうなにもせずに楽らくに暮くらしてゆけるから。」というのでありました。

金持ちかねもちは、また、毎日まいにち、毎日まいにち、今日きやうはどこからか金色こんじきの魚うおを捕とらえて持もつてきてくれはしないかと、そればかり待まちちあぐんでいました。けれど、どういふものか、金色こんじきの魚うおはなかなか取とれませんでした。

河辺かわべへゆくと多くおほの人々ひとびとが、口々くちぐちに金色こんじきの魚うおは、まだ釣つれないだろうかといつていました。

「まだ、釣つれたという話はなしを聞きかない。」と、一人ひとりがいますと、

「それなら安心だ。金色の魚は、俺が釣らなけりやならぬ。」と、一人はいつて、自分**ぶん**がその千両の金**りやうかね**をもらう覚悟で、根気よく糸を垂れているのであります。けれど、そこにも、ここにも釣れる魚は、みんな黒色のものばかりであつて、一つとして金**きん**光り**びか**を放つ大魚はかからなかつたのであります。

一方金持ちの病氣はだんだん悪くなるばかりでありました。古い者が金の魚を食べればなおるといつたけれど、そんな金の魚は、この世の中に棲んでいないのかもしれない。たとえ棲んでいても、自分の不運のために、その魚が針や、網にかからないのかもしれないと金持ちはなげいていました。

金持ちは、外へ出て河のほとりへいつてみますと、どこの河辺も人でいっぱいでありました。みんな金色の魚を捕らえようとしているのです。

「これほどまでにしても、金の魚がかからないなら、まったく、俺の運がつきたのだ。」と、金持ちはつくづくと我が身の上を悲しんだのであります。

金持ちは、これだけの金を持ち、土地を持ち、なに不足なく暮らすことができ、そのうえに、年も、まだそう老つたわけでないのに、これをみんな残して、自分独り死んでいつてしまうことは、なんと**いふ**悲しいことだろうと思ひました。

「どうしたら金^{こんじき}色の魚^{うお}が捕^とらえられるだろうか。」と、金持^{かねも}ちは思い^{おも}惑^{まど}いました。

名^{めいじん}人^{うらなしや}の占^{うらなしや}いは、もはやこの町^{まち}にはい^ありません^るでした。旅^{たび}から旅^{たび}へ、渡^{わた}り鳥^{どり}のよう^{ある}に歩^{ある}

く占^{うらなしや}いは、どこへかいつてしま^あったのです。金持^{かねも}ちは、いまさらそのことを占^{うらなしや}いにた

ずねることもできなかつたのであります。

ある夜^よ、金持^{かねも}ちは不思議^{ふしぎ}な夢^{ゆめ}を見^みました。自分^{じぶん}は、遠^{とお}い南^{みな}へ旅^{たび}をしたのであります。そ

れは暖^{あた}かな、明^{あか}るい国^{くに}でありました。いろい^あろな町^{まち}を通^{とお}り、いくつ^あかの船^{ふね}のた^あくさん泊^とま

つてい^ある港^{みなと}を見^みて過^すぎました。そして、ある日^ひのこと、目^めの前^{まえ}に、みか^あんのな^あつてい^ある山^{やま}

をな^あがめ^あました。

旅^{たび}人^{ひと}は、あるときは船^{ふね}に乗^のつたり、あるときは馬^{うま}に乗^のつたり、またあるときは歩^{ある}いて、

こ^あこまできたのであ^あります。山^{やま}はそ^あんなに高^{たか}くあ^ありません^あでした。冬^{ふゆ}の季^き節^{せつ}であり^あました

けれど、林^{はやし}の下^{した}には、緑^{みどり}の草^{くさ}が一^め面にし^あげつてい^あました。この国^{くに}には、冬^{ふゆ}というもの^あがな

かつたのです。その山^{やま}を上^{のぼ}りますと、あ^あなたに海^{うみ}があ^ありました。海^{うみ}の上^{うへ}は眠^{ねむ}るよう^あに穏^{おだ}や

かであり^あました。海^{うみ}のほと^ありに、町^{まち}があ^ありました。いろ^あいろの建^{たて}物^{もの}がそ^あの頂^{いた}を青^{あお}い空^{そら}に

そ^あびえてい^あました。つば^あめがさ^あえず^ありな^あがら町^{まち}の上^{うへ}を飛^とんでい^あました。

その町^{まち}の中^{なか}に、赤^{あか}い旗^{はた}が、長^{なが}いさ^あおの先^{さき}にひ^あらめ^あいてい^あます。それ^あは、万^{まんび}病^{よう}を治^{なお}す

不思議な温泉のわき出るところでありました。

その温泉へいつて入って、病気がみななおってしまったのです。そんな夢を金持ちは見たのでありました。

目がさめてからも、金持ちは、夢に見た景色がありありと残っていて忘れることができませんでした。

「ほんとうに、そんなところがあるのではないかならうか。」と、考えていました。

すると、ちようど町に入ってきた薬売りがありました。金持ちは、薬がきいても、きかなくても、薬売りが入ってくれば、かならず買ったのであります。

「おまえさんは、諸国を旅してまわんなさるが、もしやみかんのなる山のふもとで、海のほとりに町があつて、そこからよくきく温泉の出るところをお知りになりませんか。」と、金持ちは、薬売りにたずねたのであります。

「そういうところは、私は、幾か所も見ました。みかんの園が山にあつて、その下に海があつて、町のあるところで温泉の出るところは、幾か所も見ました。」と、薬売りはいいました。

「なんでも私が夢に見たのは、赤い旗がひらひらとひるがえっていましたが。」と、あわ

ねな病^{びょうにん}人の金持ち^{かねも}はいつたのです。

「赤^{あか}い旗^{はた}のなびいていると、ああ、それはここからたいへん遠^{とお}い南^{みなみ}の国^{くに}でありますよ。私^{わたし}が、たしかに見^み覚え^{おぼ}えがあります。しかし、その町^{まち}を過^すぎたのは、三年^{ねん}前^{まえ}でした。」と、
薬^{くすり}売^りは答^{こた}えました。

金^{かね}持^もちは、いろいろその町^{まち}のことを薬^{くすり}売^りから聞^きいて深^{ふか}い思^{おも}いに沈^{しず}んでいました。
ある日^ひ、金^{かね}持^もちは、たくさんのお金^{かね}を馬^{うま}に積^つんで人^{ひと}の知^しらぬ間^まに、南^{みなみ}の国^{くに}を指^さして、今^こ生^んの思^{おも}い出^でに朝^{あさ}早^{はや}く旅^{たび}立^だちをしたのでありました。

それとも知^しらずに、人^{ひと}々^{びと}は、なお毎^{まい}日^{にち}、河^{かわ}のほとりにきて、釣^つりをしていました。
「いつになつたら金^{こん}色^{じき}の魚^{うお}がかかるのだらう。」と、口^{くち}々^{くち}にあくびをしながらいつていたのであります。千^り両^{りょう}の金^{かね}になれば、いくら仕^し事^{ごと}を休^{やす}んでもけつして損^{そん}にはならないと思^{おも}ったからでありました。

けれど、金^{こん}色^{じき}の魚^{うお}は、ついにかかりそうもありませんでした。

あまり性^{せい}質^{しつ}のよくない、甲^{こう}と乙^{おつ}と丙^{へい}は、ある日^ひ、三^{さん}人^{にん}寄^より集^{あつ}まって、

「金^{こん}色^{じき}の魚^{うお}があるなんて、うそのことだ。ほんとうにいまいますい。ひとつみんなをだましてやろう。そして、もし、金^{こん}色^{じき}の魚^{うお}がここにいる三^{さん}人^{にん}のだれかにかかったら、千^り両^{りょう}

もうけて三人で分けることにしよう。」といって、三人は、ふなを捕らえてきて、それに金箔を塗って、幾ひきも河の中に放ったのです。

ある日、河ばたでさわぎがありました。

「金色の魚がかかった。金の魚がかかった。」と、釣りあげたものがいいますと、

「金の魚が釣れた、金光りのする、ほんとうの魚が釣れた。」と、口々にいって、みなそこに集まってきました。

すると、また、同じ時刻に、

「ここでも金の魚が釣れた。」という声がした。

人々は大きわざをして、

「あすこにも金色の魚が釣れた。」といって、その方に走ってゆきました。

みんなは、金色の魚を捕らえた人をうらやみました。そして、わいわいとその人を取

り巻きながら金持ちのいる町の方を指してゆきました。

「二人に、金色の魚がかかったから、金持ちは二千両出さだろう。」と、あるものがい

いますと、

「なに一人にしか出すまい。それとも同じ日に捕らえたのだから、五百両ずつであるかも

しれない。」といって、わいわいといってゆきました。

みんなは、金持ちかねもちの家の前まえまでゆきますと、その家はあき家あきやになっていました。

「大金持ちおおかねもちが、どこかへいつてしまうようなことはない。ちよつと近所きんじよへいったので、すぐに帰かえつてくるだろう。」といって、みんなは家の前まえで待つていました。けれど、日ひが暮くれかかつて帰かえつてきませんでした。

金の魚きんうおを釣つつた二人ふたりのものだけは、まだ家の前まえに立つて待つていましたが、あとのみんなは、いつしか自分じぶんの家へ帰かえつてしまいました。

二人ふたりのものは、てんでに自分じぶんの捕とらえた金の魚きんうおが死しなないように大事だいじにして、それを守まもつて金持ちかねもちの家の前まえに立つていました。そして、心こころの中で、どうかして相手あいての金の魚きんうおが死しんでくれればいと祈いのつていました。そうすれば、とどこおりなく、千両りやうの金かねが自分じぶん一人ひとりの手てに落おちると考かんがえたからであります。

二人ふたりのものは、たがいに顔かおをにらみあつてもものもいわずに、一夜ひとよ、その家の前まえに立ちあかしました。

けれど、翌日あくるひになつて、日ひはいつしか高たかく上あがつたけれど、金持ちかねもちの帰かえつてくるけいははなかつたのです。その中うちに二人ふたりのものは腹はらが減へつて目めがまわつてきました。

そんなこととは知らず、金持ちは、南へ南へと旅をつづけていました。

ふたり 二人のものは、金の魚を殺さないように、大事にして、毎日、昼も夜も、金持ちが帰ってきたら我れ先に金の魚を金持ちに渡そうと思つて家の前に待つていました。すると、だれいうとなく、金の魚は、ふなに金箔を塗つて河に放したのだということがわかりました。二人はたいへんがっかりして、捕らえた魚を河へ捨ててしまいました。

金持ちは、いつまでたつてもきませんでした。そして、あき家になった家はいつしか荒れはててしまいました。広い屋敷には草がしげつて、秋になると虫が鳴き、春になるといろいろな花が咲きました。

その後の金持ちの身の上については、だれも知つてゐるものがありませんでした。おそらく、南の方の知らない町をたずねてゆくうちに、どこかで病気が重くなつて死んだのだらうということです。

しかし、不思議なことに、河には、それからというものは、金色の魚がたくさんにふえました。人々が釣りをしていると、たびたびその糸にかかりました。また網にもかかつてきました。

けれど、金持ちのような病気が、またとその町にはなかったから、金の魚を食べたも

のがありません。そればかりでなく、金の魚^{きんうお}は、食べるものでないといういい伝え^{つた}になりました。

いまでも、その町^{まち}の名物^{めいぶつ}は、河^{かわ}に金色^{こんじき}の魚^{うお}がしぜんにかくさん棲^すんでいるというこ
とであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第1刷発行

初出：「面白俱樂部」

1921（大正10）年1月

※表題は底本では、「金《きん》の魚《うお》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年12月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金の魚

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>